

「戦国武将 森忠政 津山城主への道」

特集

木造森忠政公坐像(本源寺にて公開中)

初代津山藩主、森忠政。津山の城は森忠政によって築かれ、それ以降、津山は城下町として発展してきました。

今年には津山城築城から400年にあたり、さまざまな記念行事が開催されています。津山郷土博物館では、津山城築城に着手し、津山をつくった人物森忠政にスポットを当て、10月9日(土)から特別展「戦国武将 森忠政 津山城主への道」を開催します。

特別展に先立ち、森忠政について、そして特別展の見所について尋ねようと、美作大学1年生の真嶋大輔さん(上河原・写真右)、上原悠輔さん(沼・写真左)といっしょに、津山郷土博物館を訪れました。

まず、津山藩ができるまでの津山はどのように治められていたかを簡単に教えてください。

美作国ができたのは、和銅6年(713)。その後時を経て戦乱の世になるとこの地は津山盆地を中心に山名氏や赤松氏などによ

り統治されていきました。

戦国時代末期には宇喜多秀家の所領でしたが、関が原の戦いの後、小早川領となりました。

ところが、その小早川家もわずか2年で断絶してしまい、その後、森忠政が18万6、500石の藩主として美作国に入り、津山の礎をつくったのです。

森家と忠政の生い立ちについて教えてください。

もともと森家は清和天皇に始まる清和源氏の流れをくみ、祖先は前九年の役・後三年の役で活躍した八幡太郎こと源義家であるといわれています。

美濃国(現在の岐阜県)に土着し、戦国時代は斎藤道三、織田信長などに仕える武門の名家でした。森家の姓を名乗ったのは

は、義家の6男義隆。その15代目にあたる美濃金山城主(現在の岐阜県兼山町)・森可成が忠政の父にあたります。

忠政の父可成は、織田信長に属していた有力武将で、弘治2年(1556)4月の美濃国斎藤義竜攻め、永禄11年(1568)9月の近江国六角氏攻め、同12年(1569)8月の伊勢国北畠氏攻めなど、各地の戦いに

出陣して戦功を立てました。



森 忠政 年表

- 元龜元年(1570) 美濃国金山に生まれる
- 天正10年(1582) 織田信長に出仕 本能寺の変
- 天正12年(1584) 兄長可討ち死に 金山城7万石を相続
- 慶長5年(1600) 徳川家康より信州川中島を拝領
- 慶長8年(1603) 美作国拝領
- 慶長9年(1604) 津山城築城に着手
- 慶長19年(1614) 大阪の陣
- 元和元年(1615) 大阪落城
- 元和5年(1619) 福島正則改易のため 広島城受け取りに出兵
- 寛永11年(1634) 京都にて没

一方、忠政の母は、森家の重臣、林新右衛門の娘で、元龜元年(1570)9月に可成が討ち死にした後、**紉髪して妙向尼**と称し、浄土真宗に帰依しました。

忠政は元龜元年(1570)美濃国金山にこの夫婦の6男として生まれたのです。



織田信長画像 (部分・兵庫県立歴史博物館蔵)

ということとは、忠政は父の顔を知らずに大きくなっていたのですね。本能寺の変で亡くなった**森蘭丸**は兄だったと聞きました。

この夫婦には6人の男子がいました。1番上の可隆は越前の戦いで討ち死にしました。

天正10年(1582)、織田信長が明智光秀によって本能寺で倒されたとき、兄長可は信濃(現在の長野県)に兵を進め、海津城に入っていました。直ちに美濃に引き返しました。そのとき、まだ13歳だった忠政は、近江(現在の滋賀県)の安土城にいたとされています。忠政は急きょ難を逃れて、

現在でも忍者の里としてよく知られている甲賀の里に入って身を隠し、その後、金山からの迎えによって国元に無事帰り着いたといわれています。

本能寺の変で亡くなった蘭丸は忠政の3番目の兄にあたります。この本能寺の変で、忠政は4、5番目の兄坊丸、力丸も亡くしています。

戦乱の世の常とはいえず、忠政はわずか13歳で父と4人の兄にも死に別れたのです。

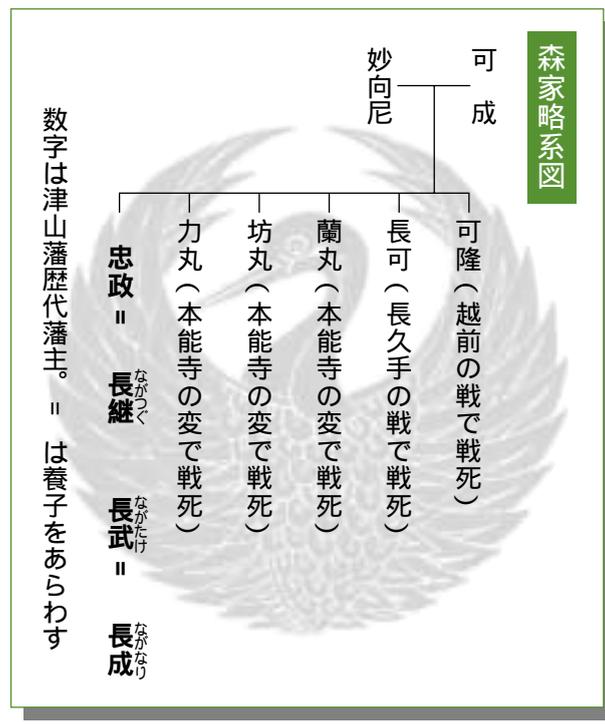
ただひとりとなった兄長可は豊臣秀吉に仕え、勇名をはせていました。しかし、森家を率いていた長可も天正12年(1584)長久手の戦いで討ち死にしました。

忠政は豊臣秀吉に属して金山城主となり、美濃国で7万石を領します。若くして領主となった忠政は、老練な重臣たちに支えられながら、戦国武将として成長していくことになりました。

混乱を極めた戦国時代。森家は信長、秀吉の天下取りにもかかわっていたのです。武將となった忠政は、この時代をどのように過ごしていくのでしょうか？

慶長3年(1598)、豊臣秀吉が没すると、諸大名は石田三成派と徳川家康派に分かれていきました。そうしたなかで、忠政は、徳川家康に付く道を選択しました。

慶長5年(1600)2月には、家康によつて**信濃国の更級、水内、埴科、高井4郡**で13万7、500石を与えられ、川中島の海津城に入りました。関が原に向けて大きなうねりが起こり始めるきっかけとなった領地替えでした。



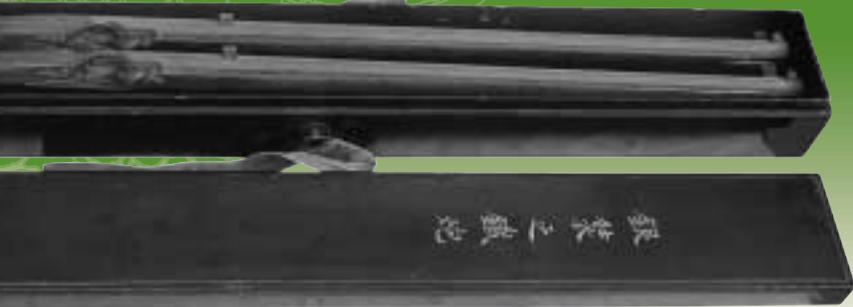
特別展のおもな展示品



あぶみ
鶴丸紋鎧 (赤穂大石神社蔵)



くま
鶴丸紋鞍 (赤穂大石神社蔵)



銀装火縄銃 (赤穂大石神社蔵)

特集

津山城築城400年記念特別展 「戦国武将 森忠政～津山城主への道～」

ところが東軍家康側に付いてはいたものの、実際の関が原の戦いでは、忠政は徳川秀忠の配下に属して上田城の押さえを勤めたため、参戦はできませんでした。慶長8年(1603)2月6日、忠政は徳川家から美作国一國を拝領して、18万6、500石を領する国持ち大名となったのでした。

この美作国18万6、500石というのは、ランク的にはどつなのでしょうか？ 国持ち大名は全国的にも20くらいしかありませんでした。その中で18万石よりもっと小さい国持ち大名もいます。また、その地位や朝廷からもらう官位もトップクラスの中将であったことから、それなりに尊重されていたといえるので

しょう。

美作国を与えられた忠政がその後、津山のまちをつくっていったのです。美作に入った忠政は、領内経営の根幹となる城下町の建設に着手し、壮大な津山城とその城下町を築きます。また、美作地域の伝統的な勢力を、村役人層としてうまく取り込んでいった

のでした。こうして美作国は統一され、安定した社会は、新たな発展へつながっていきました。徳川幕府の支配下で大名としての地歩を固めた忠政でしたが、寛永11年(1634)7月7日、3代目将軍家光の上京に先立って上った京都において、65年間のその生涯を閉じました。

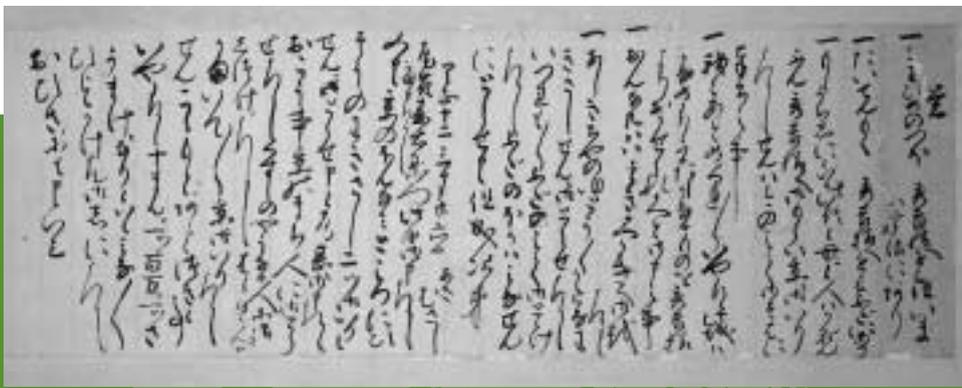
津山郷土博物館では、10月9日から森忠政の特別展が開催されますが、忠政ゆかりの多くの品々を見る事ができるそうです。特別展の見所について教えてください。

ただが残っていました。このような状況で書かれた遺言状の中には「私がもし討ち死にしたら母上は、かんにん分を秀吉様からもらい京で暮らすように。忠政に自分の跡を継がせるのはいやです」という内容が書かれています。次々に家族を戦で亡くしてきた母に対する思いと、末弟忠政だけは生きてほしいとの願いがこもっています。

「森長可遺言状」

これは長久手の戦いに行く長可が母に送った遺言状です。「このときすでに、母は織田信長に仕えた夫可成と息子4人を戦で亡くしており、長可と忠政

結局、長可はこの戦で討ち死にしまいました。しかし、一國の城主ともなると多くの家臣の運命もその手にすることになります。忠政は兄のこの願いには沿えず、15歳で金山城7万石を継ぐことになりました。



森長可遺言状（名古屋市博物館蔵）



森忠政所用鎧地塗菱綴一枚胴具足
（赤穂大石神社蔵）



豊臣秀吉画像
（名古屋市秀吉清正記念館蔵）



細川家九曜紋入洋鐘（南蛮文化館蔵）



「細川家九曜紋入洋鐘」

津山城の完成を祝って小倉城主細川忠興から贈られた南蛮風の釣鐘で、細川家の紋である九曜紋が入っています。忠興はこの鐘を津山城天守最上層の間の天井につるしてあり、このようすは記念事業で作成したコンピュータ・グラフィックスの中でも描かれています。

この鐘に対する忠興の思いや忠興との親交を象徴しているといえるでしょう。ちなみに、忠興の妻であった細川ガラシャは、鐘が贈られた時期にはもう亡くなっていました。

このほかに、豊臣秀吉から贈られた「諸紋散模様胴服」。大阪城攻めるとき、徳川家康から忠政へ贈られた「銀装火縄銃」など歴史的にも興味深い資料がたくさんあります。

この機会にぜひ多くの人に見ていただきたいと思っております。

ゆかりの品々に実際にふれることで、さらに戦国武将、森忠政に迫ることができそうですね。私たちも特別展が始まったらぜひこの目で確認したいと思えます。どうもありがとうございました。

津山城築城400年記念特別展

「戦国武将 森忠政」

「津山城主への道」

とき 10月9日（土）～11月14日（日）

月曜日および祝日の翌日は休館日

ところ 津山郷土博物館

開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

入館料 一般210円、高校生・大学生150円、中学生以下無料

問い合わせ先 津山郷土博物館 022-4567へ

